

Essay

花 に よ せ て

丸 山 咲 野



今わが家の玄関は、いつにもまして活気に溢れている。送別会にいただいた淡いサーモンピンクの薔薇の蕾がほどよくほころび、昨日送られた胡蝶蘭は5本仕立ての鉢植えに真っ白の25個の花をつけて優雅に、そして華やかさに一層の彩りを添えている。そこへセントポーリアの御帰還である。

広辞苑によるとセントポーリアは、イワタバコ科の多年草でタンザニア・ケニア南部に自生する同属二種を中心に育成された園芸植物。約10 cmの花柄の端に軟毛をもつ円形の多肉葉を叢生。葉と同じ高さの花梗に、スマイレに似た五弁花を多数開く。花色は紫・紅・白等多くの品種がある。アフリカすみれ。と記されている。セントポーリアは、キリマンジャロの岩陰にそっと咲いている花だから栽培には15℃位の風通しのよい所が適し、直射日光を避けてレースのカーテン越しが良いと聞いたのが、なるほどとうなずけた。

この花を手掛けたきっかけは、6,7年前に同僚の先生からいただいた一鉢の栽培に始まる。

早速家に持ち帰り楽しんだものの、先ずは越冬に失敗し、もう一度いただいた分も夏の暑さを凌ぐことができなかった。ひと気のない家での自然生育は無理と考え、温室を購入、店主のすすめに従って育成用の蛍光灯とヒーターを備えて、温湿計と花の顔色をうかがう習慣が身についた。無事に冬を越し葉ざしを試みたものの、液肥の効果か葉ばかり色艶よく繁り、花芽は一向につけてくれそうもなかった。太陽光線の不足ではとの助言で、太陽を求めて玄関と二階の往復が始まったのである。窓の関係で朝日の恵みをうけた後、一旦戸袋で遮られ再び陽光が注ぐ。以外に早い太陽の回転と季節による日脚しの長短を実感したのもこのときである。この花の季節は過ぎたといわれながらも、葉と葉の間に米粒ほどの蕾をみつけた時の胸のときめきは格別のものであった。太陽を求めて鉢植えを小刻みに移動させる話に、まさにその花は「おせん様」と冷やかされたりもした。この期間店頭でセントポーリアに魅かれて、濃い紫・中心が真っ白な紫のぼかし・それに濃いピンク等幾鉢かも仲間入りをさせた。開花期を終え、小休止した後次の開花を迎えるというように、丁度半分つづ交代に競って咲いているようでもある。そのうち休み中の半分を入院と称して学校へ持参した。南側の窓際に花の置ける空間を得たからである。日当りに於いて家の比ではないその場所は、年中太陽の恵みをうけて、生き生きとしている。ものを育ててみて、自然の偉大さ、

環境の大切さを痛感する。もちろん太陽のみではなく水、そして慈しむところの大切さでもある。いつかラジオ相談で耳にした言葉「花が水を欲しそうにしたらやってください」。まさにその通りである。顔色を観察し、葉と葉の間に指を入れ、そっと土の渴きを確かめる。母親が赤ちゃんのオシメの湿りを確かめるあの時指先に感じる乾湿の感覚、そして想い、まさしくそれに通じるものがある。幾月か経て、葉ざしから始めた小さな鉢にも、またあの米粒のような蕾をみつけることが出来た。光をうけて黄金のように輝くめしべ、濃い紫の花梗の群れ、まる

で紫陽花を思わせる。葉の2,3枚が乞われて嫁いだ。それ等が揃って再びわが家へ帰還し、元の仲間達と空間を共有したのである。新しい環境になじめるであろうか？ しばらくはより細やかな観察が必要になる。

教育もあらゆる意味の環境を整えることにあつた。生き生きとした花々の息吹に包まれ、いま最高の幸せを感じながら、異なった環境に巣立って行った多くの学生達は、それぞれの世界で自分をなにごとに色に染めて咲いてくれているだろうか、それまでに一滴の水たり得たであろうかと、退職のときを迎え、切に想うことである。